

Title	第1章概説
Sub Title	
Author	
Publisher	学校法人慶應義塾
Publication year	2019
Jtitle	重要文化財 慶應義塾図書館保存修理工事報告書 (本編) (2019. 9) ,p.1- 10
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12004001-00000000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第1章 概説

第1節 修理工事概要

慶應義塾図書館は明治42年(1909)5月26日に起工し、同45年(1912)4月15日に竣工した。設計は曾禰中條建築事務所、施工は戸田組であった。同事務所は、当時の建築界にあって辰野葛西建築事務所と共に指導的立場にあった事務所で、施工者の戸田組にとって、この工事を受注できたことは最高の荣誉であったと言う。

建物は壁体を煉瓦積とし、スパンの大きな部屋や大きな荷重が掛かる書庫等の床組に、鉄骨と鉄筋コンクリートを併用した。床組だけとはいえ、この頃はまだ鉄筋コンクリートを使用した建物はあまり例がなく、施工に際して、設計者にとっても施工者にとっても大変苦勞の多い工事であったと言われている。また、図書館という建物の性格上、防火対策に最大限留意したあとも見て取れる。

大正12年(1923)9月1日に発生した大地震は、図書館にも大きな被害をもたらした。被害は書庫以外の特に東側に集中し、書庫部分の被害は軽微であったようだ。これは、他の部分に比較して厚く積まれた煉瓦壁と、鉄骨と鉄筋コンクリートを併用した床スラブが功を奏したと考えられる。

この復旧工事に際し、書庫の西側に鉄骨鉄筋コンクリート造の第二書庫が新設された。工事は本館復旧工事に先行して行われることとなり、昭和2年(1927)1月4日に着工し、8月5日に竣工した。建物は壁・床スラブだけでなく、切妻の屋根スラブ面にも鉄筋コンクリートを使用して、耐震・防火性能を高めている。

本館の復旧工事は、8月19日に着手し、翌年8月25日に竣工している。東側の2階以上の煉瓦壁をすべて撤去し、鉄骨鉄筋コンクリート造に改める大改造が施されたが、書庫部分は被害が少なかったため手を加えることなく存置できた。

昭和20年(1945)5月26日、図書館は二度目の災難に遭遇することになる。空襲によって、木造であった屋根野地材や床材が焼失し、小屋組の鉄骨も熱に

より大きく変形してしまった。一方で、書庫部分は屋根を焼失してしまったにも関わらず、地下1階から4階にいたる書庫はすべて無事であった。

復旧工事は資材物資の不足の影響から、着工が昭和23年(1948)12月末まで延びることとなり、落成は翌年5月5日であった。書庫を除く部分の小屋組は鉄骨トラス組から木トラス組に改めざるを得なかったが、他の焼失してしまった各部屋は、焼失前の形式に倣って再建されている。

その後、昭和36年(1961)に第三書庫が増築され、同44年(1969)3月には、第一書庫と旧館部分の建築的価値が認められ、重要文化財に指定された。昭和57年(1982)の改修工事を経て、平成28年(2016)11月1日より、国庫補助事業として免震レトロフィット工事に着手することとなった。

また、前回の修理から約35年を経過しており、屋根・外装・内装等で経年による劣化や破損が目立つようになっていたことから、同時に保存・維持修理も行うこととなった。工事業は令和元年9月30日にすべて完了した。

建物は、構造、階数や形状が複雑であったため、耐震壁やブレースなどによる耐震補強工法では、建物の持つ空間や意匠を現状通り維持することが困難と見られていた。しかし、基礎下に免震装置を設置する免震レトロフィット工事を採用することで、空間や意匠に手を加えることなく、現状通り維持できたと考える。

第2節 建造物の概要

1 慶応図書館の沿革

図書館は慶應義塾設立50周年記念事業として建設されたもので、明治42年(1909)着工し、同45年(1912)に完成している。構内の東北隅に建ち、設計は曾禰・中條建築設計事務所、建設費は24万円余で施工は戸田組であった。内部に蒸気暖房および電気設備を備えたが、停電の場合も考慮しガス灯も併設されたと言う。

構造は煉瓦造を主とし一部鉄筋コンクリートを用い、また、外壁には石材やテラコッタを一部配している。建物は半地階付の2階建てで、東側は半地階を倉庫及び荷造室、1階事務室、2階閲覧室とし、東南の八角塔や東北の一部に3階が設けられている。八角塔3階はとくに月波楼とよばれている。西側は書庫になり、中廊下をおき、内部は6階に分けている。

この図書館は関東大震災に一部亀裂を生じ、大正15年(1926)から昭和初年にかけて補強・改修が行われ、その後戦災で内部を焼失したが復旧されている。内部は戦災復旧によってほとんど改まったが、正面入口部分から広間、階段室などに当初のまま残されている。

玄関広間と階段室には3連の尖頭アーチをうける双柱が立ち、優れた意匠をみせる。この部分は埼玉県秩父産の大理石が用いられ、図書館内でもっとも装飾的な場所になる。階段窓に入れられている和田英作の原画によるステンドグラスは、戦災で破壊されたが昭和49年(1916)に旧状どおり復原されている。当初の形式をよく保存しており、すぐれた意匠を見せている。この構図はペンハムよりも強いという標語に基づいたもので、書庫正面の時計文字盤とともに、当時の斬新なデザインを示している。

慶應義塾図書館は以上のように二度の災害にあっているが、外観は当時の形式をよく残しており、正面の尖塔アーチの窓、縦の線を強調する書庫の壁面、切妻を高く見せその頂きに飾るピナクルやフィニアルなど、ゴシック様式をとり入れ、見事な意匠を見せている。明治末期洋風建築の代表的遺構として貴

重なものである。

『文化財保護法施行30周年記念出版 解説版新指定重要文化財13 建造物III』「重要文化財」編纂委員会編 毎日新聞社参照

2 重要文化財の指定

(1) 文部省告示第三十六号

文化財保護法(昭和二十五年法律第二百十四号)第二十七条第一項の規定により、次の表に掲げる文化財を重要文化財に指定する。

昭和四十四年三月十二日

文部大臣 坂田 道太

建造物の部	
名称	慶應義塾図書館
員数	一棟
構造及び形式	煉瓦造、建築面積六八四・四平方メートル、二階建、地下一階、一部三階、書庫六階、亜鉛引鉄板葺(正面玄関広間、階段室以外の内装を除く。)
附	設計図 六五枚 ステンドグラス原画 一枚
所有者	学校法人慶應義塾
所有者の住所	東京都港区芝三田二丁目一五の四五
所在の場所	東京都港区芝三田二丁目一五の四五

(2) 文部省告示第四百四十八号

次の表の上覧に掲げる重要文化財の名称、員数並びに構造及び形式についての記載事項を同表の下欄のように改める

昭和五十九年十二月二十八日

文部大臣 松永 光

上覧	
名称	慶應義塾図書館
関係告示	昭和四十三年文化財保護委員会告示第二十四号
下欄	
名称	慶應義塾図書館
員数	一棟
構造及び形式	煉瓦造、建築面積六八四・四平方

メートル、二階建、地下一階、一部三階、書庫六階、スレート及び銅板葺（正面玄関広間、階段室以外の内装を除く。）

附	設計図	六五枚
	ステンドグラス原画	一枚
所有者	学校法人慶應義塾	
所有者の住所	東京都港区三田二丁目一五番四五号	
所在の場所	東京都港区三田二丁目一五番四五号	

3 主要寸法（規模）

平面（壁真々）

全体	東西 34.938 m	南北 25.971 m
書庫部分	東西 10.208 m	南北 16.681 m
東側建物本体部分	東西 20.682 m	南北 13.533 m
八角塔部分	東西 6.584 m	南北 6.584 m
大階段室部分	東西 6.118 m	南北 9.394 m
東北隅部分	東西 9.848 m	南北 8.391 m
昇降口部分	東西 4.267 m	南北 2.965 m
軒高	地盤面より軒蛇腹石上角まで 12.973 m	
棟高	地盤面より棟上端まで 19.337 m	
平面積	壁真内側面積	
全体	646.278 m ²	
書庫部分	170.280 m ²	
東側建物本体部分	279.890 m ²	
八角塔部分	43.349 m ²	
大階段室部分	57.472 m ²	
東北隅部分	82.635 m ²	
昇降口部分	12.652 m ²	

4 構造形式

イ 平面

1階 南面中央部分に昇降口を設け、風除室の石階段を登ると、両開戸の先にエントランスホールが広がり、北面奥を大階段室とする。階段室とホールの部屋境に秩父産緑色大理石の2列8柱からなる3連アーチを架け渡し、連続した開放空間としている。大階段踊り場北面のスチールサッシ窓は、戦災で焼失した和田英作原画による小川三知製作のステンドグラスを再現している。

を再現している。

エントランスホールの東面南寄りに展示室を配し、この部屋の東南に接した八角塔部分に泉鏡花展示室を設け、周囲壁に沿って、2階にいたる鉄製階段を設ける。展示室の北面東寄りを控室とし、西隣に階段室を配し、地階にいたる鉄製階段を設ける。

大階段室の東隣を記念室とする。南面壁の中央に暖炉を設ける。

エントランスホールの西隣には南北に跨る縦長の福沢研究センター事務室を配する。西面中央に書庫への出入口を設け、北面西寄りに第3書庫への渡り廊下を設置する。

2階 踊り場付両返し大階段を登り、2階大階段室にいたる。

南側は大会議室とする。東南隅は八角塔の一辺となるが、ほぼ長方形で、館内最大の部屋となる。スチールサッシ窓を南東北の3面に設け、南面中央の窓外にはバルコニーを設ける。西面中央に両開戸を設け、書庫3階の廊下に通じる出入口とする。東南隅の八角塔部分を書庫とし、周囲壁に沿って、最上階にいたる鉄製階段を設ける。

大会議室北面の東寄りの北側を前室とし、北面が3階に通じる階段室で、木造階段を設ける。西面が大階段室、東面が小会議室となる。

3階 東南部八角塔3階部分は2階八角塔図書室の上部吹抜となり、2階から周囲壁に沿って鉄製階段で最上階に通じる。また、北東部の3階は、階段室南面西寄りに小屋裏へいたる鉄製階段を設け、東面に空調機械室を設ける。

地階 北側大階段室の階段を降りきると、南面にホールを配する。

ホール西面を考古学展示室とし、西面に書庫出入口を開く。東面南寄りの出入口を東に向うと廊下を経由して東面入口にいたる。廊下南側を書庫(2)とし、書庫(2)の東南の八角塔地下部分を倉庫とする。廊下の北面の東寄りに倉庫(1)を配し、西寄りに階段室を設ける。

また、大階段室の東隣に書庫(東)を設け、北面の渡り廊下の先端に便所を設ける。

書庫 図書館の西側に位置し、南北を桁行、東西を梁間とした矩形平面の建物を付設する形式とする。書庫は4階建てで、地階と屋根裏に部屋を設ける。

地階より4階までは、南北中央部分に廊下を配して、南北に煉瓦造間仕切壁を積上げ、各階とも南北二方に一部屋ずつ配す。また、各階西端隅の床を穿ちリフトを設置する。外壁の窓や廊下境の出入口、廊下東西出入口にはすべて鉄製防火戸を設置する。

ロ 基礎

本工事で当初の煉瓦積布基礎と独立基礎を新規鉄筋コンクリート造補強梁で挟み込み、PC鋼棒で一体化し、免震装置で支持した。当初の地階土間床はすべて新規鉄筋コンクリート床となった。

ハ 壁体

地階部分、南面及び東面の外壁外側花崗岩切石積、内側煉瓦積。北面及び西面、外壁煉瓦積3枚半積、書庫北面のみ4枚積。内壁間仕切壁2枚・2枚半・3枚・3枚半積。

1階部分、外壁煉瓦3枚積、ただし玄関南面4枚半積、書庫南・北面3枚半積。八角塔部分、大階段室北面・西面北寄り鉄骨鉄筋コンクリート造。内壁間仕切壁煉瓦2枚・2枚半・3枚積。

2階部分より上部は、書庫外壁南・北面煉瓦3枚積、東・西面2枚半積。書庫周りを除くすべての部分は鉄骨鉄筋コンクリート造。

ニ 小屋組

書庫部分、戦災の熱の影響で湾曲した鉄骨トラス組の上に木下地をかさ上げし、木製屋根下地張り。書庫を除く他の部分、木トラス組に木製屋根下地張り。

ホ 屋根

屋根下地、鉄骨トラス・木トラスに木製母屋を渡し、垂木を流し、野地板張りし、平部分を天然スレート葺、陸屋根・大棟・隅棟・降棟銅板葺、大棟端部・八角塔頂部フィニアル付。

ヘ 外装

地階部分、南面及び東面の外壁外側花崗岩切石積、北面及び西面は化粧焼過煉瓦張り。地上部分は、書庫西面・北面に当初の化粧煉瓦張りが残存、その他は震災復旧工事の際に張り替えた小口タイル張り。

軒蛇腹、ロンバルディア帯、胴蛇腹下飾り、正面入口突出部・書庫、東面北寄り突出部、北面階段室・書庫妻壁切妻笠石、八角塔バトルメント・クロケット・跳出し狭間テラコッタ。正面入口突出部・書庫、東面北寄り突出部、北面階段室・書庫部分隅石、窓枠・アーチ・楣・窓台・胴蛇腹・昇降口見付部分花崗岩。

ト 建具

書庫両開鋼製枠組扉、地階両折鋼製枠組窓、大会議室スチールサッシに当初材が残る。その他大部分は震災復旧工事で新設したと考えられる。(高村)

第3節 事業の経過および運営

1 事業の経過

(1) 補助事業に至るまでの経緯

イ 耐震対応

平成7年(1995)阪神・淡路大震災を機に慶應義塾では、保有する建物、およそ100棟の耐震診断を実施した。慶應義塾では耐震性に問題のある建物の耐震補強、建替工事を、まずは生徒・学生の利用する校舎、次いで病院施設を優先しながら20年かけて実施してきた。平成8年(1996)に実施された耐震診断により、図書館も耐震強度(性能)不足と診断され、構造設計者より免震レトロフィット工法による耐震対策工事を提案されたが、当時は校舎を優先的に補強する方針であったことや、免震レトロフィット工法の事例が少なかったこと、高額であることから、耐震対策工事の実施には至らなかった。

ロ 計画・業者選定

平成27年(2015)に慶應義塾で保有する建物の耐震化が終盤に差し掛かり、ようやく図書館の耐震化を進めることとなった。昭和57年(1982)の改修から35年が経過し、経年劣化による不具合箇所も散見されていたことから、耐震工事と合わせて、保存修理工事も実施することとなった。耐震計画は免震レトロフィット工法を採用する方針とした。

設計者を選定するため、平成27年9月に3社による提案競技を行った結果、株式会社三菱地所設計(以下、三菱地所設計)を設計者として選定した。また、重要文化財建造物の工事であることを鑑みて、設計監理の技術指導監理者を株式会社文化財保存計画協会(以下、文化財保存計画協会)に依頼することとした。その後、三菱地所設計による9ヶ月の設計作業の後、施工業者を決めるため、平成28年(2016)6月に2社による指名競争入札(6社声かけをし4社辞退)を行った結果、戸田建設株式会社(以下、戸田建設)を施工者に選定した。

ハ 補助事業の申請

当初は慶應義塾の自主財源により、図書館旧館、第一書庫、第二書庫の工事を行う計画であったが、重

要文化財を含む工事であるため、文化庁との協議の過程で、重要文化財指定建造物である旧館および第一書庫は国庫補助事業として実施し、未指定の第二書庫は所有者の自主事業として実施することとなった。そこで、前者については、文化庁の承認を受けた主任技術者を有する文化財保存計画協会に、後者は三菱地所設計に設計監理を委託した。

平成28年9月29日、国へ「重要文化財 慶應義塾図書館 近代化遺産等重点保存修理事業」交付申請書を提出、同年11月1日に交付の決定を受けた。

(2) 事業の経過

慶應義塾図書館保存修理工事は、耐震補強を伴う部分修理工事として計画した。

事業は慶應義塾の直轄事業とし、事業の設計及び管理を文化財保存計画協会に委託し、工事施工は、平成28年6月の入札により選定した戸田建設に委託することとした。

平成28年度は、総事業費600,000,000円を計上し、第1期工事として、平成29年(2017)2月1日付けで、設計監理契約、工事請負契約をそれぞれ先述の2社と締結した。

着工後、地盤の強度調査を行ったところ、基準値より大きく下回っており、仮設計画を見直す必要が生じたため、事業期間を平成29年3月31日から同年12月28日まで延長する計画変更を平成29年3月17日付けで文化庁へ申請し、同年3月31日に承認を受けた。

耐震補強工事では、山留、躯体基礎の補強の後、根切工事、躯体荷重仮受材の構築を計画していた。

地盤の掘削の過程で、基礎形状が当初図面と相違する部分が多数見られたため、基礎の配置を再度確認し、基礎の補強計画の見直しを行う必要が生じた。そのため、工期を平成30年(2018)3月31日まで延長する計画変更を平成29年12月21日付けで申請し、同年12月26日付けで承認を受けた。

修理工事では、外部及び内部の一部に足場を設置し、現状の破損調査を行うと同時に、補修方針の適性を判断するために既存のタイル張りの引張試験、

鋼製建具の修理、擬石の見本作成および試験施工、屋根の一部葺き替えを行った。また、耐震補強工事のため掘削された、躯体基礎についても形状や仕様を調査した。このほか、補強用鉄筋や外壁用タイルなどの資材を購入した。

平成29年度（第2期工事）は、平成30年1月15日付けで国庫補助事業を申請し、同年2月1日に交付の決定を受けた。

総事業費142,000,000円を計上し、平成28年度からの工事に引き続き、躯体の荷重を移行するための荷重移行支柱設置工事を行った。また免震装置の一部先行製作の他、第一書庫と旧館の煉瓦壁の倒れこみを防ぐための鉄鋼の材料発注と一部加工取り付けを行った。

修理工事では、外壁タイルの引張試験の結果を踏まえ、修理方針を決定して施工を開始した。当該試験および現地調査により、煉瓦タイル下地の仕様は複数種存在することが判明し、その調査に日数を要したことから、現場施工の着手が遅れた。そのため、平成30年5月31日まで工期を延長する計画変更を同年3月26日付けで申請し、3月30日付けで承認を受けた。並行して、大会議室の鋼製建具、ドーマ窓棟飾りの銅板補修を行った。

さらに、当該年度では、免震装置の手配に遅れが生じたため、平成31年（2019）3月31日まで工期を延長する第2回目の計画変更を同年5月24日付けで申請し、同年5月29日付けで、承認を受けた。

平成30年度（第3期工事）は、平成30年2月2日付けで国庫補助事業（建造物保存修理事業）を申請し、同年4月2日に交付の決定を受けた。

総事業費649,000,000円を計上し、構造補強工事は、前年度に引き続き、免震ピットの構築と荷重移行を行い残りの免震装置の製作を行った。このほか、撤去した地階床とドライエリアを復旧したほか、エキスパンションジョイント工事として、第三書庫およびトイレに繋がる渡り廊下の置き換え、煉瓦塀の補強工事が完了した。

修理工事は、外壁の煉瓦タイル補修工事、鋼製建具工事、屋根工事を11月に完了し、擬石工事におい

ては、正面の校章の修理や、内装工事を施工した。

内装のうち、塗装工事については、破損状況調査の結果を踏まえ、内装の塗装工事の仕様を変更することとした。工事内容の変更を行う計画変更を平成31年3月5日付けで申請し、同年3月14日付けで承認を受けた。

最終年度の平成31年度は、平成31年1月29日付けで国庫補助事業を申請し、同年4月1日に交付の決定を受けた。総事業費43,000,000円を計上し、免震ピットの構築と免震クリアランスを設けた正面玄関及び八角等周辺の外構工事を行い、令和元年5月31日に竣工した。同年9月30日、本報告書及び実績報告書の提出を以って、事業が完了した。

また、各年度毎に、実施仕様書を添付した補助事業交付申請書、精算書や工程写真等を添付した実績報告書を提出した。このほか、工事の進捗状況を報告するため、工程月報を毎月提出した。なお、これらの書類は全て、港区教育委員会、東京都教育庁を経由して文化庁に提出した。

総事業期間：平成28年11月1日～令和元年9月30日
(33ヶ月)

総工事期間：平成29年2月1日～令和元年5月31日
(26ヶ月)

平成28年度

事業期間：平成28年11月1日～平成30年3月31日

工事期間：平成29年2月1日～平成30年3月31日

平成29年度

事業期間：平成30年2月1日～平成31年3月31日

工事期間：平成30年2月1日～平成31年3月31日

平成30年

事業期間：平成30年4月2日～平成31年3月31日

工事期間：平成30年4月2日～平成31年3月31日

平成31年度

事業期間：平成31年4月1日～令和元年9月30日

工事期間：平成31年4月1日～令和元年5月31日

(渡辺)

2 事業の組織

事業は慶應義塾の直轄工事とし、管財部が担当窓口となって、自ら事業発注を行った。

事業の遂行にあたっては、文化財保護法、補助金に係る予算の適正化に関する法律及び同法施工例をはじめ、文化庁文化財補助金交付規則など関係法規に基づき処理した。

工事の設計監理は、文化財保存計画協会より文化財建造物修理主任技術者及び技術職員が派遣され、現地調査に基づいて設計監理にあたった。

耐震に関する設計については、入札の結果、三菱地所設計が担当することとした。

工事の施工は、入札によって選定された戸田建設が請け負った。(渡辺)

3 事業関係者

事業者

学校法人慶應義塾

塾長	長谷山 彰
常任理事	渡部 直樹
管財部長	繁森 隆
管財部施設担当課長	鈴木 健史
管財部工務担当主任	渡辺 浩史
管財部施設担当主任	岡部 三喜雄

設計監理

株式会社文化財保存計画協会

代表取締役	矢野 和之
特任主任研究員	高村 功一
主任研究員	舘崎 麻衣子
技術員	成 浩源

構造設計

株式会社三菱地所設計

執行役員	野村 和宣
ユニットリーダー	太田 俊也
ユニットリーダー(監理)	仲條 有二
ユニットリーダー(電気設備)	神谷 元一
ユニットリーダー(機械設備)	小林 伸和

チーフエンジニア	篠田 悟
チーフアーキテクト	大澤 学志
チーフアーキテクト	吉原 実香
チーフエンジニア(監理)	尾原 祐介
チーフエンジニア(積算)	須貝 成芳
エンジニア(機械設備)	高瀬 茉実

施工請負者

戸田建設株式会社

東京支店支店長	横溝 祐次
作業所長	木村 靖
副所長	刀川 安満
建築主任	川西 秀徳
建築係員	佐々木 淳希
技術部長	上長 三千良
技術課長	鮫島 敏見
技術課長	藤田 和司
技術課長代理	久原 寛之

協力会社

図面作成

有限会社MD建築研究所 杉並区 木田 誠

鳶・土工事

株式会社才賀組 新宿区 才賀 孝司

有限会社須藤工業 江東区 須藤 日出洋

型枠工事

株式会社三増グループ 練馬区 高山 朝幸

鉄筋工事

高橋工業株式会社 横浜市 高橋 英雄

坂本スチール 大田区 坂本 秀希

電気設備工事

東光電気工事株式会社 首都圏支店

港区 小宅 満

給排水衛生空調設備工事

三建設備工業株式会社 東京支店

中央区 赤瀬 宏司

土工事

株式会社輝洋建設 草加市 田中 純一

鉄骨工事鍛冶工事

豊和エンジニアリング株式会社

葛飾区 安達 直輝

免震工事（レトロフィット）

間瀬建設株式会社 本店 狛江市 間瀬 哲

工藤工業 川崎市 工藤 守

諏訪工業 江東区 諏訪 智

無収縮モルタル圧入工事

株式会社アクト・ファクトリー 東京支店

八潮市 守岡 充

鉄筋材料

伊藤忠丸紅住商テクノスチール株式会社

千代田区 中野 次郎

高木伐採伐根

株式会社大場造園 杉並区 大場 二郎

歪計設置・計測

株式会社計測リサーチコンサルタント

足立区 白石 浩二

解体工事

株式会社澤田工務店 北区 澤田 誠一郎

免震装置設置用プレート

株式会社ダイトー 北区 井上 一郎

震支承（すべり系）

日鉄エンジニアリング株式会社

品川区 藤原 真一

石工事

株式会社安藤大理石 本店

品川区 三和 磨生

技能者 西澤 健太

外壁汚れ落とし

株式会社ストーン・プロメンテ

さいたま市 木村 英明

技能者 金子 貴久

中嶋 真吾

平井 光春

株式会社キハラシステム

吉川市 木原 良一

技能者 小田 隆志

中村 浩

免震工事（仮設鋼管杭）

株式会社ルーファース 千代田区 土屋 良太郎

あと施工アンカー

吉田アンカー工業株式会社

武蔵村山市 吉田 唯一

山留工事

ヒロセ株式会社 東京本店

江東区 宮本 篤

コンクリート圧送

東武圧送株式会社 越谷市 寺田 信男

ガス圧接工事

株式会社前田ガス圧接工業

大田区 前田 勝男

鉄筋架台 OS クリップ

板橋建材工業株式会社 江戸川区 秋元 章太郎

EXP. J 金物

株式会社UACJ 金属加工 墨田区 竹川 幸男

アルミ金属工事

株式会社アミック 目黒区 藤森 貴

仮設電気工事

株式会社エル・アイ 松戸市 小島 美穂

内装工事

萬産業株式会社 本店 横浜市 長谷川 次郎

墨出し

株式会社関野建測 秦野市 関野 英俊

左官工事擬石洗い出し

東京建材工業株式会社 台東区 栗原 一寿

技能者 長島 ふじお

土島 正有

折居 道晃

大久保 司

塗装工事

平岩塗装株式会社 大田区 平岩 敏史

技能者 藤田 嵩明

原 健太郎

増村 悠

洗浄保存処理

株式会社ケミカルプロセス シー・ピー

世田谷区 萩原 義久

有限会社千代田塗装 相模原市 国武 雅彦

技能者	国武瑞彦	技能者	青山誠
	塚田実		伊豫田洋一郎
吸水防止処理（材料）			増山治二
株式会社環境セラステクノ 営業所			斉藤玲雄
	板橋区 水津浩之		加藤高義
シーリング		株式会社制作美術研究所 越谷市	山本鐘互
株式会社日興社	江東区 篠田秀樹	技能者	山本正
タイル浮き内視鏡調査			岡村隆志
FS テクニカル株式会社	葛飾区 関本繁	ハードファクター株式会社 堺市	峯豊一
	福田勇太	技能者	小川博幸
タイル浮きピンニング工事ピンニング、樹脂注入			峯貴士
株式会社工業技術研究所	文京区 田辺玲子	庄司塗装工業株式会社 新宿区	庄司園子
技能者	阿部拓馬	技能者	岡本昭夫
株式会社スタイルズ	川崎市 山之内勝昭	木製建具工事	
技能者	内藤一也	株式会社エフ・スリー 足立区	新宮清美
	山本潤一	技能者	山本三治
屋根スレート補修		押し出し成型セメント板	
日本セラミックス株式会社		アイカテックエンジニアリング株式会社	
	中央区 渡邊君雄		中央区 古北盛行
担当	渡邊成士	手摺金物	
技能者	杉田康徳	株式会社國井工務店 新宿区	國井吉久
松崎瓦興業 茨城県下妻市	松崎良和	技能者	川田大輔
技能者	鈴木賢司	清掃クリーニング	
屋根銅板補修屋根飾り銅板打ち出し		清建株式会社 荒川区	湯本茂作
久保板金工業株式会社 足立区	久保武治	マシンハッチプレコン	
技能者	久保綱洋	柏プレコン株式会社 柏市	山内勇
	鈴木信市	仮設雨樋配管工事	
	井上雄二	ユタカ鋼業株式会社 北区	伊藤豊
	菅原綾太	ウレタン塗膜防水	
	福村正弘	株式会社ワールド・アッシュー	
	大宮秋一		昭島市 佐藤守
原形作製、型取り、石膏		免震層位置確認システム	
株式会社植野石膏模型製作所		株式会社免震テクノサービス	
	新宿区 植野彰規		横浜市 古畑成一
担当	植野守人	フックウホース設置	
技能者	石橋朋英	株式会社O.R.N 豊島区	加瀬澤盛隆
	佐々木宏通	硝子工事	
スチール窓補修		遠藤硝子株式会社 墨田区	遠藤俊
三和タジマ株式会社 豊島区	前田好之	技能者	上山長宏

有限会社中央建窓	千葉市	秋山博子
技能者		秋山進
		市川貴雄
株式会社吉野硝工	葛飾区	吉野憲一
技能者		佐藤一郎
		鵜沢光男
		中山正道
		安彦達也
有限会社小林硝子工業所	志木市	小林紀次
技能者		鵜沢光男
		近藤康宏
梶野硝店	葛飾区	梶野将弘
技能者		伊藤剛

タイル工事

不二窯業株式会社	東京本社	
	中央区	松本康之
担当		佐藤信也
株式会社フォーユー	草加市	吉宗宗恭
技能者		平戸亮成
		飯田良一
		後藤雅弘
木下目地	小金井市	木下範男
三水商事	世田谷区	辻和重
技能者		阿部次

外構工事

株式会社安信	調布市	安藤信男
--------	-----	------

総事業費（旧館・第一書庫・第二書庫）

	総額	25.9 億円
工事費		24.3 億円
免震レトロフィット工事		19.4 億円
保存修理工事		3.4 億円
その他付帯工事		1.5 億円
設計監理費		1.6 億円

補助事業費（旧館・第一書庫）

収入総額	1,434,000,000 円
国庫補助額	717,000,000 円
東京都補助額	358,500,000 円
所有者負担額	358,500,000 円

総事業費	1,434,000,000 円
修理工事経費（工事請負費）	1,369,286,000 円
耐震補強工事	864,165,055 円
免震レトロフィット工事	790,085,099 円
エクспанティッドジョイント工事	57,299,121 円
上屋補強工事	16,780,835 円
保存修理工事	185,550,525 円
仮設工事	24,132,586 円
煉瓦タイル補修工事	48,264,220 円
鋼製建具補修工事	22,890,000 円
屋根補修工事	62,207,800 円
石擬石補修工事	23,869,400 円
内装工事	4,186,519 円
共通仮設工事	34,628,060 円
諸経費	183,513,769 円
消費税	101,428,591 円
設計料および監理料	64,714,000 円
設計監理費	59,920,371 円
消費税	4,793,629 円

(館崎)

4 事業費

(1) 総事業費

重要文化財指定範囲（旧館・第一書庫）は国交補助事業として、未指定範囲（第二書庫）は慶應義塾の自費工事として実施した。不可分については、按分または所有者負担とした。

(2) 補助事業費

総事業費は約 25.9 億円のうち、補助対象である重要文化財の範囲の事業に係る費用は 14.34 億円であった。